虫ぼし抄

関西大学所蔵

「村田春門家集」（原題『藤門雑記　近代和歌』）(2)

関西大学図書館　手紙を読む会

一　はじめに

この「村田春門家集」は、『関西大学図書館フォーラム』第二十二号（二〇一七）に掲載した一～三十丁表の続きにあたる。その解説については、第二十二号をご参照いただきたい。今回は三十丁裏～七十六丁裏の最後までを翻刻した。

なお、関西大学図書館手紙を読む会のメンバーは、以下の通りである。森川　彰（助言者）、池尻孝子、鵜飼香織、田中純子、中川敏子、長谷章子、瓢野由美子、福嶌真奈、八尾奈緒美

二　凡例

翻刻については、次の要領に従った。

- 漢字は、原則として常用漢字に改めた。
- 仮名は、原則として片仮名及び平仮名を用い、変体仮名は平仮名に改めた。
- 踊り字はそのままにした。
- 破損、虫害、判読不能は□で示した。推測できる場合は□の中に字を入れた。
- 難読字は（　）でかなを付した。
- 丁移りは　」で示し、上に丁数と表（オ）、裏（ウ）と明記した。

よのひとの　わりなくくもの　いとはれて　さすかにすめる　月そかたふく　同

猫

ふるころも　つみゆるされぬ　ものとてや　ねつミならへる　ねこまなるらむ　同

山家秋興

山さとの　かきほにかゝる　つたかつら　にほひてあそふ　けふにもある哉　同

紫蓮尼のいほりハ日下の山のなかハにありてにしき色目路

かきりなく海かけて見わたされたり　松のこの間にさくらかへて

枝をかハしとりのさへづりむしの声まていとあハれふかき所

なりけり　おのれかつねにおもふにかなふ所又ほかにハあらし

うら山し　よしのゝたけの　おくまてと　さすかによをハ　おもひすてねハ　同

おなし庵にて月を見て

なにハより　はるかなりつる　いこまねの　このまの月を　かそへてそミる　同

秋の山に松たてり

しかもなき　もみちもせねと　外山なる　松のいろさへ　あきさひにけり　同

31ウ」

名所鶉

声たつる　うつらころもの　みしかさニ　秋のさかのゝ　つゆそみにしむ　同

わけゆけハ　かたのゝうづら　床かへて　みちなきかたに　今そ鳴なる　同

雨夜思月

あやにくに　月のよころを　ふる雨の　おとのみしけき　まとのくれたけ　同

月のため　あたらこすゑを　はらハせし　かひなくそゝく　よはのあめ哉
同

暁天渡雁

つら〳〵に　つらねきにけり　春の雁　なきてわかれし　よこくもの空
同

松間月

さよなかと　かけハふけても　軒ちかき　松をはなれぬ　あきのよの月
同

月前恋

されハよと　おもふもうれし　月いるゝ　けしきハかりに　さゝぬねやの戸
同

32オ」

浦月

うらのあまも　かつきつくさて　秋をへて　なみまにしづく　月のしらたま
同

雲収月行辺

そらの海　くものうき波　しつまりて　月のミふねそ　かけとゝめける
同

庭前月

月やとる　つゆのしけさに　庭ハ野と　あれつるあきも　うれしかりけり
同

月前尋恋

しをりせよ　月人男　おひしきて　いるかけ見えし　かたたつねてん
同

寄月祝

ひさかたの　月のひかりを　千万に　わけてとしある　ミつほたるらん
同

古寺月

しきみたく　けふりハそらニ　さはらすて　月の光の　ミつのおほてら
同

花路月

をりかたき　月のかつらの　花陰に　たちうかるらん　秋の宮人
同

32ウ」

山月

くもゝなく　月あかきよは　やへ山と　かさなるみねも　さたかなりけり
同

寄月変恋

はれくもる　月の心と　しりなから　くやしくかけて　契りつる哉
同

紅葉如酔

うまさけを　ミわのこのまの　もミち葉ハ　うへしもゑへる　いろにそめけり
同

山鹿

秋風の　ふくにまかせて　ゆくくもニ　ましるかミねの　さをしかの声
同

惜秋

のこりなく　秋ハ来けり　こさまさる　もミちをゝしむ　こゝろまきれニ
同

秋風満野

のハなへて　ひとけもミえす　荻薄　声をあハせて　秋風そ吹
同

33オ」

隣家紅葉

わかならぬ　となりのその、　もみちはも　心にしみて　をしまるゝかな
同

紅葉厭風

もみちふく　かせのこゝろの　さかなさは　しくれをさへニ　さそひきに

けり　同

紅葉送秋

もみち葉ハ　つゆしもふかき　ミ山より　くれゆくあきを　まつおくるらん　同

秋樹

もミちせぬ　松ももみちに　ましりてハ　中ゝあきの　いろをそへけり　同

秋井

あきのよは　井のへのかつら　つゆちりて　月のひかりを　たゝへつる哉　同

山路菊

山ひとの　やとハとゝへと　しらつゆの　ミたれてきくの　にほふたにかけ　同

山ふかく　きくをしをりて　いるまゝに　そてのかさへも　秋さひにけり　同

待恋　33ウ」

わすれてハ　こよひさへにそ　またれける　かならすあすと　たのめしもの　同

山路時雨

そてのつゆ　しほりて　こゝに松陰や　はるれハかゝる　ミねのしくれを　同

初冬暁

さをしかも　鳴よはるらし　まはきさく　あきハゆめのゝ　暁の霜　同

霜夜月

あしかも、　はふきなく也　月さえて　水の上にも　霜やおくらむ　同

たか〳〵と　をのへをかけて　おくしも、　おなし色なる　月そしつけき　同

松の葉の　月のひかりハ　それなから　かせのまに〳〵　霜そこほる、　同

月かけハ　いよゝさやけし　しもなから　このはしくるゝ　よはの山かせ　同

水郷眺望

夕けふり　薄くくれけり　海士の刈　ミるめハおひぬ　しほづすかうら　同

東宮　34オ」

わかやかに　たもとつらねて　出入も　のとけきはるの　ミやのうちかな　同

大臣

かけひろく　むらさきにほふ　ふちなミハ　あふくもたかき　つかさなり　同

殿上人

ゆるされて　みはしをのほる　うれしさハ　つゝむたもとの　いろに見え　同

名所時雨

さためなき　しくれのあめの　あしほ山　てるかたわくる　ゆふつく日かな　同

寄衣恋

うまひとの　あやのみけしの　みにおハぬ　こひをハこひぬ　ためしなら　同

雨後遠山

ふりそゝく　あめのなこりの　ふかミとり　とほやまちかく　はれわたり　同

時雨晴陰　34ウ」

かさやとり　たちいてはやと　おもふまに　またかきくらす　むらしくれ哉
同

夢逢恋

あハれとハ　わか中神も　おもふらん　さすかにゆるす　ゆめのかよひち
同

庭空草

わかやとの　かけにもせんと　たのミしを　霜さやくなり　庭の枯荻
同

落葉帯霜

おく霜の　あさひに丶ほふ　ぬれ色ハ　ちりてもこさの　まさるもみち葉
同

寄海恋

いへと〳〵　ひとのこ丶ろハ　いさなとり　海さへあさき　わかおもひかな
同

海辺千鳥

おきなミの　うへより風にあらハれて　いそつたひして　ちとり鳴なり
同

寄衣恋

よにしのふ　下のにほひも　あらはれて　うきまつハしの　うへのきぬかな
同

35オ」

依忍稀恋

かすならぬ　吾名ハあれと　きみか名の　をしのけころも　まれにきにけり
同

山家雪

春こハく　あらましことも　いたつらに　つもるミやまの　雪の下いほ
同

露

おきいてて　くさのたもとに　くらへ見む　かたしくそての　暁のつゆ
同

名所霞

は丶き丶の　おもかけきえて　そのハらや　ふせやもわかぬ　夕かすミかな
同

五月雨晴

めづらしく　そらいろ見えて　かりこもの　さミたれはる丶　よとの沢水
同

薄のうへより　けふりたちたるかた

うらやまし　むろのやしまの　夕けふり　ひとにおもひを　しのハさりけり
同

田残雁

おハれしと　おもひのとめて　刈果し　冬田にかりの　わたりきぬらむ
同

35ウ」

俄逢恋

にハたつミ　にはかにあめの　ふりいてて　なかれあふせそ　うれしかり
ける
同

なかれてハ　又ゆくりなく　あへりけり　はやくわかれし　川島のミつ
同

初冬

いろふかき　もミちもきくも　それなから　そらより冬の　けしきたちけり
同

寒閨聞霰

かきおこし　ふけゆくねやの　埋火の　おもひくたくる　たまあられかな
同

来不留

おも荷つむ　さかちのくるま　と丶めても　おしてもはやく　かへる関かな
同

春日山鹿

かすかやま　ミねのさをしか　鳴なへに　にほふゝもとの　ゝへの秋萩　同

かんきくはしはみ　物名　36オ」

いさゆかむ　きくのミならて　よしの河　しは見てこそハ　よしともいはめ　同

遠山時雨

ミねわきて　ふるほとミゆる　むらしくれ　はやくおひしく　うきくもゝ　同

すミかまの　ミねのけふりを　かきけちて　いくたひけふハ　うちしくるらむ　同

しゝまひ

ひとさハに　おとりたちまひ　のゝしるを　しゝまひみよと　いかていふらむ　同

橋上霜

もとつ葉ハ　つみのこしたる　かしは葉の　かれはのしもの　つゆそしつけき　同

片恋

こゝろから　なけきそしける　としをへて　つれなきひとを　片恋の岡　同

載安道故事　冬遠情

からひとの　あとをそおもふ　山陰や　ほそたに河の　雪のあけほの　同

名所炭竈　36ウ」

すミかまの　けふりに見えて　つくは山　このもかのもの　風そミたるゝ　同

冬雨

つねにふる　あめのおとさへ　けふ〳〵と　うつれハかはる　冬のよはかな　同

待花

はなハよの　つねなるものと　しりながら　こゝろもとなく　日をかそへつゝ　同

さくことハ　春にまかせて　さくら花　またしとおもへハ　あめそかすめる　同

夕郭公

ほとゝきす　あすはたいかに　またすらむ　いまきゝそむる　夕くれの声　同

おなしくハ　ちかくなかなむ　三日月の　ひかりほのめく　山ほとゝきす　同

名所雪

ミるひとも　なくてきえけり　おほハらの　ふりにしさとの　けさのしら雪　同

忍恋

しのふにも　あまりておつる　なミた哉　まきれもはてぬ　ゆめのなこりに　同

川なミの　水のしら波　おともなく　われてあひみる　よしもあらなむ　同

羇旅　37オ」

さめかたき　ゆめのまくらの　朝あらし　みつるミやこの　つゆはらふ也　同

みやこをハ　そゝろにいてて　たひころも　まよひゆくなる　かたそはる　同

けき

社頭祝

みつかきに　かくるしめなハ　うちはへて　よハのとかなる　はつ風そふく

もろひとの　よむことの葉も　ひかりある　いほつゝとひの　たまつしま山　同

遠炭竈

山つミの　たつるみつきと　たか〳〵に　けふりたえせぬ　をのゝ炭竈　同

松雪

つくしわた　あたゝかけにも　みゆるかな　風ハそらふく　松のしら雪　同

春ことに　きゆとハすれと　松かえの　ちよつむものハ　雪にそありける　同

寒日経詹短

ふゆのひの　のきはの柳　ちりはて、　いともミしかく　くれかゝりけり　同

行路氷

をくるまの　かよふ市路の　朝氷　くたけなからに　またむすひつゝ　同

37ウ」

松霜

わかさとの　岡へのまつの　朝嵐　しもゝおかしと　吹はらふらむ　同

関時雨

あつまちの　せきのゆきかひ　いとまなく　うまやのすゝの　ふるしくれかな　同

山亭冬到

もミち葉は　さそひもはてす　冬ハまた　たつとはかりの　軒の山風　同

朝霜

むくらふハ　朝しもきえぬ　よひ〳〵の　月のひかりを　つゆにとゝめて　同

閑庭紅葉

もミち葉の　したてる庭の　こけしミつ　いろあたらしと　くむひともなし　同

冬野

くれなゐも　ミとりもかれて　おくしもの　しろきにかへる　冬のゝへかな　同

38オ」

冬動物

すさましミ　見すてゝとさす　月更て　よをもるいぬの　声そひまなき　同

にこふすま　かつきふしたる　埋火の　あるかなきかの　声さへもうき　同

閑庭落葉

冬くれハ　このはみたれて　中ゝに　ものさわかしき　にはのゆふ風　同

人伝恨恋

まくす葉の　うら見んとおもふ　折こそあれ　たよりうれしき　山こしの風　同

冬莚

さらぬたに　よはのあらしの　さむしろに　まきの葉しのき　あられふるなり　同

冬苔

かせをいたミ　いはほのかたの　こけのうへに　このはころもを　かさねてそきる　同

初冬日

冬の日ハ　のこるもミちも　なにはかた　かり跡のあしの　みしかゝりけり　同

38ウ」

初冬衣

かせさむき　冬のけしきも　しられけり　くち葉かさねの　衣手の杜

冬野

かくれたる　みちハかた〳〵　あらはれて　ひとかけもなき　かれの原かな　同

落葉満流

いまもなほ　あきのなこりの　ありてゆく　おち葉か下の　あさ川のミつ　同

鳥さしといふものゝ絵に

のかれきて　すむかひもなし　もちとりの　かゝるうきよの　さかの山さと　同

未不言恋

ひとやりの　なけきならめや　我心　うしとやさしと　いひもやらねハ　同

初恋

ことにてゝ　なにゝたとへむ　からころも　むねあひそむる　よはのこゝろを　同

月前水鳥

39オ」

をしかもハ　いまもむれゐて　かけこほる　月やむかしの　はりやすの池　同

むかしをおもふ恋

通いにし　そのかたしろも　なきさはの　もりしうき名そ　おもひいてなる　同

としころも　おもひたゆとハ　なかりしを　なにいまさらの　なみたなるらむ　同

寄催馬楽恋

まれにしも　なにたゝくらむ　おしあけて　きませわかせこ　さゝぬいた戸を　同

寒松

たまくしけ　あくるミやまの　風さえて　霜吹こほす　松の下陰　同

秋をへて　みさをミたさす　吹かせの　さゆるや松の　こゝろなるらむ　同

冬夜難明

そはたつる　ねさめのまくら　いくたひか　しもに声ある　かねそよふかき　同

筆墨紙　物名

むすふての　雫もこほる　あさ川そ　けさハますミの　かゝみなしける　同

寄水恋

39ウ」

つれなしと　おもふこゝろの　なくさめに　ひとりかすかく　みつくきの跡　同

霜夜月

ひさかたの　そらゆく月も　おくしもに　ひかりしみつく　庭のくまさゝ　同

後朝切恋

わかれしハ　このあかつきの　つゆのまの　おほつかなさに　みこそやせけれ　同

片恋

つるきたち　もろハならねと　身にそひて　忘られかたき　ひとのうへかな　同

あられ

冬こもり　たれまつとしも　なきやとに　風のしきたる　たまあられかな　同

道堪か家にて冬至の日

もの、音も　こよひハわさと　あら玉の　はるのこゝろを　吹かへすらん　同

川千鳥

むらちとり　ミたれなくなり　ときつ風　ふくやなミこす　野田の玉川　同

40オ」

忍てこゝろをかよハすこひ

しのひつゝ　こけの下ゆく　ミつくきの　あとみるのミそ　いのちなりける　同

いとはるゝ恋

いとへたゝ　いとへハとても　死かハり　おもひやむへき　吾こゝろかは　同

聞恋

おとにのミ　きくの浜風　よるなミの　ぬれきぬをたに　ひとにきせはや　同

夜水鳥

あらしふく　よはにさわきて　水とりの　こほらぬかたに　しろやかふらむ　同

冬野鹿

あらはなる　冬のゝ原に　さをしかの　つのふりたつる　むらしくれかな　同

冬市

たてまつる　弓弭のミつき　あまりある　御代のいちちの　冬そにきはふ　同

しもふミて　あしとき駒ハ　あきひとの　うりかふいちの　ひまやゆくらむ　同

40ウ」

芦花似雪

名にしおふ　ゆきのしま風　ふくまゝに　あしの花こそ　そらにミたるれ　同

刈のこす　たゝひともとの　あしのほの　ほのにゆきちる　夕かせそ吹　同

梅に鶯のきゐるかた

梅あれハ　かならす来ゐる　鶯ハ　たかいさめをか　わすれさるらむ　同

しほかまのかた

あまのたく　うらのしほやの　けふりより　沖浪かけて　かすミそむらん　同

喜里川のさとにてふみよみとけるついてにとしのくれと

いふことをひと〳〵とゝもによみたるにこゝにかよひそめしより

はやくとしへたることをおもひてよめるつらねうた

ことの葉の　みちのしをりの　あとゝめて　かよふミとせも　いまハくれ

けり　同

くれぬとも　さのミなけかし　うつせミの　ひとのよハたゝ　かくこそハ

あれ　同

かくこそハ　あれとおもへと　いたつらに　つもる月日そ　くやしかりける

同

くやしさを　おもひはるくる　ことのはも　めつらしけなく　つもるとし

かな　同

つもりたる　わかミのとしの　かすをのミ　ほこらハしけに　かきかそへ

つゝ　同

41オ」

寄笛恋

つま琴に　ふきあハすめる　ふえたけの　もとすゑとほる　契りともかな

同

吾せこか　のるこまふえの　こまほしく　おもふゆふへに　声そきこゆる

同

池氷

日もかゝミ　かたくむすひて　たかために　いけのこゝろの　とけぬなる

らん　同

芦花似雪

をりかさし　ミせはやひとに　あしのほの　ゆきとミたるゝ　そてのけしきを　同

風のむた　雪かなからふ　いなをかも　長江の岸に　あしか花ちる　同

河水鳥

もミち葉ハ　庭にくちゆく　谷川に　なほいろ見ゆる　をしのむらとり　同

冬の日も　のとかにうつる　玉しまや　なゝせのよとに　うかふミづとり　同

窓前雪

したをれハ　いとふものから　おもしろく　雪こそつもれ　まとのくれたけ　同

雪ふかく　ふりしもしるく　さよなかに　まとのいたとの　ひましらみけり　同

41ウ」

嶋雪

たくひなき　ミるめなりけり　あさひかけ　たゝさすしまに　つもるしら雪　同

なみのゆふ　あはちしま山　しろたへの　ゆきのころもを　かさねきにけり　同

ちかのうらや　ちかき笆の　しまさへも　とほくミるまて　雪そつもれる　同

寒山月

ゆきもよふ　あらしハたえて　ミ山木の　こすゑにこほる　有明の月　同

山さとハ　雪もこほりも　てる月も　ひとつにさゆる　軒のよあらし　同

遠山雪

おほひらや　をひえにかゝる　雲はれて　けさみそめけり　ミねのしら雪　同

ありま山　ミねのしら雪　をり〳〵ハ　あらしの庭の　花とちりなむ　同

都雪

小車の　ワたちも見えす　白雪の　けさこゝのへに　ふりつもりてハ　同

ふりにきと　とものみやつこ　まをすらし　雪の花さく　あけかたのそら　同

42オ」

椎柴

こりつみて　冬こもりする　山さとハ　よにゆたかなる　軒のしひしは　同

花もみち　さそひつくせし　山風の　つひのよるへの　ミねのしひ柴　同

人のもとより色よきぬをおくりけるよろこひに

山ひめの　心つくして　これそこの　秋へておれる　にしきなるらむ　同

寄魚恋

川よとの　こひのいろこの　かす〳〵に　おもひしづめる　我ミなりけり　同

あゆさへも　時をしくれハ　山河の　うれしきせをも　のほらすやある　同

井岡春蔭かをとのこうませたるをいはひて

たちならふ　松のときはの　かけこそハ　よこもるかめの　すミところなれ　同

氷

冬なから　日のさすかたハ　あつ氷　さすかにとくる　おとのさひしさ　同

水たまる　いけの下ひも　ふゆの日ハ　こほりのくさひ　さしかためけり　同

立春　42ウ」

なには江の　あまたとしなミ　たちかへり　たちかへりつゝ　春そたのしき　同

としのくれニ

月も日も　けふとくれてハ　こむ春を　まつよりほかの　なくさめもなし　同

年内立春

としのうちに　かすミもなにも　とりあへす　いかてか春の　いそき立らむ　同

初春水辺

柳かハ　はるかせわたる　みしまえや　やゝあをみゆく　なミの下草　同

風光日ゝ新

はるたつと　かすミそめしも　けさよりハ　きのふハちかき　ミねのしら雪　同

登梅

冬かけて　さきつる梅の　花なから　ミるひとたれか　花にあくへき　同

早春待花

さくら色に　かすミのころも　そめてきむ　ときそまたるゝ　いつしかと　同

のミ　43オ」

早春

花かさし　わかなつまむを　いまよりハ　のへのしらゆき　はやもけならむ　同

鶯声隔樹

のとかなる　春のひかりの　さし柳　なひくそなたに　鶯のなく　同

霞

はれわたる　沖のしらなミ　ほの〳〵と　かすむもけさや　うらのはつしま　同

はるのはしめに

山からす　ねくらたちて、　なく声も　としのはしめハ　ことにしありけり　同

あけにけり　とやまの松の　しら雪も　いつしかけさハ　かすミそめつゝ　同

むら山の　雪のひかりも　ほの〳〵と　かすむかうすく　けさハ見えけり　同

里鶯

うくひすハ　こすゑ春めく　さとゝひて　おのか古巣を　あこからすらん　同

雪のゝち月あかきよ梅のかをりけれハ

あやまたす　風こそかをれ　月雪も　おなしいろなる　うめの初花　同

43ウ」

む月の三日四日うちつゝき雪のふりけれハ

こほりゐし　たかねのミゆき　吹ときて　さそひきぬらむ　はるのはつ風　同

ふりつもる　ミゆきハ冬の　ものなから　しつくそはるの　おとをたてける　同

夕鶯

鶯ハ　声さやかなり　ミねもをも　かすミはてたる　春の夕くれ　同

正月七日きのえ子の日なりけれハ

青柳の　えたとひくゝる　うくひすの　はつねのとけき　けふニもあるかな

はるかすみ　たなひきわたる　小松原　うへこそけふハ　はつねなりけれ　同

ちつこかことしも若菜をうつくしきひけこにいれて
おくりけれハ
ことの葉の　其色かへす　はつわかな　かたミに春を　つむそうれしき　同

山霞

春霞　ふかくなるらし　日にそへて　とほくなりゆく　むこの山のは　同

44オ」

賭弓

あつさゆミ　はるのかすミの　たちいてて　こゝろいらるゝ　けふのもろ人　同

あやまたぬ　けふのもろやの　かちさひに　春のしらへを　吹かへすらむ　同

梓弓　とりてならへる　とねりらか　そてもゆたかに　春かせそ吹　同

おほきミの　ちかきまもりと　とるゆミの　とものおとたかき　くものうへかな　同

はなつやに　おのか心も　のりゆミの　かへりあるしそ　ゆたけかりける　同

春氷

春の日の　光にとけぬ　つれなしと　ふゆハみえつる　いけのこゝろも　同

こほりゐし　春の下根の　忘れ水　さすかに春は　おとをたてけり　同

魚始躍

山河の　なひくうきもに　ふす鮒も　はるのひかりを　けふやしるらむ　同

紅梅映日

春ふかき　梅のさかりハ　ことさらに　朝日夕日そ　こそめなりける　同

くもはるゝ　あめのなこりの　つゆさへも　夕栄ふかく　にほふうめかな　同

閑中春曙

しつけさハ　まくらにちかく　百千鳥　ちとりさへつる　春のあけほの　同

44ウ」

しはの戸ハ　風もたゝかて　はなとりの　いろねにあくる　春のよのゆめ　同

谷早蕨

いかにして　をりしりぬらむ　春の日の　ひかりもうすき　谷のさわらひ　同

もえいてし　かひハなになり　ひとしれす　春もたけゆく　たにのさわらひ　同

梅薫風　以下世首文政三年正月廿二日夜詠

春風の　かつ吹さそふ　梅かゝも　つねにことなる　あけほのゝそら　同

あたらしと　をしむかきつの　梅かゝを　心のまゝに　さそふはるかせ　同

梅かゝと　ともにつたへる　春風は　みせはや人にと　おもふ心を　同

おほつかな　たかすむさとの　梅ならん　かをり来にけり　よはの春風　同

さと〳〵の　梅さくころの　春風は　庭のたまさゝ　かにゝほふまて　同

おひしかむ　よしたにもなく　吹過ぬ　いかにかせまし　梅の春風

このあさけ　風かをりけり　鶯の　声する岡の　梅やさくらむ　同

梅かゝを　ほのかをりとて　たまたれの　をしむかひなく　過るはる風　同

45オ」

かをさそふ　風をしるへに　梅の花　ゆきてや見まし　道とほくとも　同

うめの花　こゝろにしミて　おもへとも　かハはるかせに　まかせてそやる　同

余寒月

まきの葉に　しもやおくらむ　春のよの　月かけしろく　さえかへりけり　同

月かけも　さらに氷て　山のはの　かすミ吹とく　春のよあらし　同

さしなから　月そはるなる　山河の　岩こすなみハ　さえかへりても　同

ふりつみし　雪ハさそへと　春のよの　月ハくもらぬ　ミねのよあらし　同

月さえぬ　またやハそらに　冬をしも　春の山風　ふきかへすらむ　同

春やゆめ　冬やうつゝと　こと、へと　こたへぬ月そ　そてにこほれる　同

さらにまた　かくしも月の　さえぬらん　かすミそめしハ　ゆめならなくニ　同

梅かゝハ　春のものとて　かをれとも　またさえかへる　よはの月かな　同

川風ハ　なほさえなから　柳原　けふるか月の　かけかすか也　同

あらたまる　ひとのけしきも　おもハすて　いかてか月の　さえかへるらん　同

45ウ」

初逢恋

とこなめの　あやうきせをも　初瀬河　おもへハこそハ　わたりそめけれ　同

くさまくら　むすひそめけり　草つゆに　ぬれての後の　心しらねと　同

きのふまて　あふにかへむの　あらましも　おもへハあさき　吾こゝろ哉　同

こよひしも　ゆるしそめたる　たまくらの　かひある末の　ちきりともかな　同

なみた河　わたりそめてハ　なか〳〵に　うきせにたてる　みをつくしかな　同

春のよの　はかなきゆめを　見てしより　こゝろの外に　ミたれそめつゝ　同

かきくつし　見せはやこよひ　かす〳〵に　つもるおもひの　かたはしをたに　同

あらかしめ　いまゆくすゑの　よかれをも　かこちそめたる　ねやのたまくら　同

うらワかき　のきはのをきハ　吹風の　かたゝかへとも　おもハさるらむ　同

けふよりハ　ひとをまつにや　かゝらまし　あハぬほとこそ　さてもありしか　同

をみなの春駒といふまひまふかた

はるのよの　ゆめにみてたに　よしといふ　そのワかこまの　声そいさめる　同

東大寺晩鐘

ひむかしの　みてらのかねの　声のうちに　ゆふ日いさよふ　山のはのくも　同

46オ」

国

山とほく　かへすたところ　うちはれて　たみゆたかなる　ひたかみの国　同

なかのはる

こもりのミ　をるへき時か　はるかすミ　たちてのへの　すみれつまゝし　同

翠之池塘柳

かけ見えて　ふかきみとりの　水たまる　いけのつゝみに　なひく青柳　同

つゝみなる　柳なひきて　はらのいけ　のかものあをはも　はる風そ吹　同

風わたる　いけのつゝみの　古柳　はるのみとりハ　なミやそむらん　同

かしのやのつとひに翠之池塘柳といふことをよまれたる

うたともをかきてとこひたるにおの〳〵かゝれたるを見

めて、

ことの葉の　ミとりもそひて　なひきあふ　いけのつゝミの　柳ハらかな　同

賭弓

たちまひて　かよるたもとも　梓弓　かへりあるしの　よそほしきかな　同

46ウ」

梓弓　おたしきみよは　くもの上の　春のミものと　けふやひくらむ　同

春日望山

あさ日かけ　かすミてにほふ　ひきまゆの　みとりもうすき　をちの山のは　同

列見

あきのいろを　心にかけて　たちいつる　そてのみとりに　はる風そふく　同

国

山のはの　ひかりのとかに　くにハらハ　けふりたちたつ　夕くれのそら　同

鼯鼠

山さとの　しの吹さわく　よあらしに　みねよりおつる　むさゝひの声　同

松残雪

けふもなほ　くもたちまよひ　山さとハ　友まつかえに　のこるあわゆき　同

晩風催恋

たまたれの　をちかたひとを　こひをれハ　心うこかし　ゆふ風そふく　同

晩霞隔浦

すまあかし　かすミへたて、　くれにけり　しほやきころも　まとほなら　同

ねと

47オ」

帰雁

春風や　吹おくるらん　この朝け　すゝろになきて　かへるかりかね　同

寄嶋恋

はるかなる　えそかちしまの　かす〳〵に　おもひわたれと　そのかひも　同

なし

水郷柳

老にけり　さほのさとひと　青柳の　はるハわかゆる　かけをむすへと　同

野菫

すミれさく　のへのあハれを　しりかほに　つむもやさしき　はなの色かな　同

燕来

つはくらめ　ならふ軒はの　春霞　たちもまよはす　けさそきにける　同

亀のゑに
・え

山川の　とこなめきよき　なかれこそ　かめのよをへむ　ところなりけれ　同

おのかへん　よろつよしめて　岩淵の　水のみとりの　かめそあそへる　同

河内国鷲尾山の花見に行けるにやう〳〵うつろひて　47ウ」

いまハのこりすくなゝるにあめもをり〳〵ふりあられさへ

ましりたりけれハ

なこりなき　ミやまの花の　このまより　ものおもはせに　ちるあられかな　同

花見んと　けふ分のほる　山吹の　ミのなきものを　あめさへそふる　同

雲雪と　ミねのさくらに　春雨の　ふりぬることも　めづらしきかな　同

おもほえす　あられふりきぬ　山さくら　くもと見つるハ　そらめならすて　同

蛙声幽

かはつ鳴　声もおほろに　きこゆ也　さく山吹の　花かけにして　同

遅日

小田かへす　牛のあゆミの　おそきひも　なほくれをしき　春のゝとけさ　同

深夜帰恋

ともともに　なきてわかるゝ　さよなかの　そらうらめしき　ちきり也けり　同

竹裏鶯

梅うゑて　吾まつとしも　しらさらむ　うくひすきなく　よそのたかむら　同

仏光寺のいまの君のよろこひしたまひたるに青松千年

といふことを　48オ」

みほとけの　ひかりもそひて　わかみとり　やちよの春の　松そさかゆる　同

山吹をうゑて

井出へとハ　おもふものから　道とほミ　うゑて吾見る　山吹のはな　同

春暁夜帰雁変恋のうたをあハせて便しけるに

返しつかハすとて三題をひとつによめる

あけほのに　かへるかかりの　春秋と　かはるこゝろは　うらみられける　同

寄花無常

山風を　うらむもあやな　おほかたも　花ハこてふの　ゆめのよの中　同

満ち子かむつき廿日あまり二日のひ身まかりけるに去年

河内集といふものえらひつるにはやくその名のミとゝめしことの

はかなくて

あわゆきの　はかなくきえし　春のゝの　かたみのなこそ　つゆけかりけれ

弥生の廿日あまり一日やう〳〵雨はれてそらのとかなり　同

けれハきり川のさとにゆきてやとりけるにつとめて又

しもかきくらしあめのふりいてけれハ

若葉さす　えたのかハつハ　ふりつゝく　あめにもあかて　なほもこふらん　同

とくおそき　花のさかりも　このはるハ　おほかたあめの　吹さひはてけり　同

浜臣かとふらひ来けるとき

まちえても　かひなきやとハ　なか〳〵に　たましかむとも　おもハさりけり　同

おなしときおもふこゝろありてよめる

なにはえに　なまりもをして　あしかにの　よにはひわたる　ことそやさしき　同

つゝし

かけろふの　ほのかに見えて　朝附日　むかひの岡の　につゝしのはな　同

幽栖花

いきたなく　ぬるこてふかな　ゆめのまも　をしきのきはの　花のさかりを　同

まとのとの　花かけさらぬ　てふとりそ　おなしこゝろの　ともにハあり　同

ける

山吹

うちしなひ　やへ山吹の花咲て　ほと〳〵春も　くれんとそする　49オ」

曲水宴　同

みそのふの　もゝのしたてる　水かゝみ　うつるおもわも　にほふけふかな　同

書

はしたての　たかきほくらの　むなきにも　つみあまりたる　くにつふみかな　同

虫

音す也　月毛のこまの　くつはむし　あハれよふかき　山陰にして　同

琴

としへても　わすられかたく　吾おもふ　あつまのことを　けふそきゝつる　同

重孝主一日百首よまんと催されけるに　ひと〳〵いとまちとほ

なるほと　かめにさしたる芍薬を

ことの葉の　花にたはるゝ　てふをけさ　くやくやとのミ　またれける哉　同

新樹妨月

しけりてハ　かせのたよりそ　たのミなる　はなのかならぬ　月の光も　49ウ」

匠

ひとすちも　やひろにおよふ　すミなはの　心たくミそ　かしこかりける　同

野外雲雀

なくひハリ　かすみにきえぬ　あめなるや　さくらのをのに　ゆきかよふ　同

らむ

羇中恋

なほさりの　心なくさの　ひとふしも　たひかさなれハ　わりなさそそふ　同

雨中新樹

なかめふる　春ハきのふの　枝そゝく　つゆうつくしき　さくらゐのさと
立ならふ　かへてもかしも　かきくらし　水枝をしほる　あめそさひしき　同

首夏小集

さくはなに　つとひなれたる　このもとハ　なつきてもなほ　立うかりけり　同
ほとゝきす　おなしこゝろに　待友の　つとふとたにも　そらにしらなん　同
山さとの　あろしの心　つくしなる　めづらの魚と　これもいはまし　同
かきほなる　卯花くたし　しめやかに　かたりもあかぬ　つとひなりけり　同

50オ」

女のうたかはしといひけれハ

朝夕に　よりもそハなむ　うこくやと　こゝろミかてら　まきのはしらに　同

名所山吹

さきにほふ　いろにそむきて　かはつなく　あかたのゐとの　山ふきのはな　同

首夏水

おほゐ河　なかるゝミづも　ふかみとり　あとなき花の　かすゑのみかは　同

更衣

花の色に　をりしかすみの　たてよこも　うすくなりゆく　なつころもかな　同

匠

ミやまきを　ひたのたくミか　とる斧の　おとにきはしき　とのつくりかな　同

新樹妨月

はるゝよも　この下やミハ　いたづらに　月にやとさぬ　こけのうへのつゆ　同

富士

ふしのねハ　国の御はしら　おほかミの　ほめていはひて　みたてましけむ　同

50ウ」

言和不逢恋

ことの葉ハ　みやまのこすけ　やはらかに　なひきハすれと　ねをも見ぬ
かな　同

春のよふねにのりてよと河をのほりけるに

春のよの　ふなちのとけき　ゆめのまに　ミやこにちかき　山そ明ゆく　同

春山さとに人ゝなかめゐたるに

春の日に　もゆるわらひの　夕けふり　しつかにけふも　くれんとそする　同

首夏木

さしかはす　ミつえのつゆも　ふりまさる　にはとなりたる　夏こたちかな　同

旬

夏衣　けふあらためて　おほ君の　あつきめくみそ　みにおほえける
たかとのも　みなミにむかふ　おほきミの　風心よき　あふきなりけり　同
たまハれる　あふきの風ハ　なつ衣　すゝしのあやに　かしこかりけり　同

富士

ときしらぬ　不二の真雪に　ちはやふる　かみよのあとハ　いまも見えけり
同

夏草

うもれても　かとのましミつ　すみなれて　いふせさしらぬ　いほの夏くさ
同

なつはたゝ　むくらそしける　門さして　なしといふへき　わかこゝろかは
同

をり〳〵ハ　きつねのよこゑ　きこゆまて　しけくなりけり　庭の夏くさ
同

蛍

はし居して　夕なかめする　そてのかに　なれぬほたるそ　よそになりゆく
同

夕つゝの　ひかりもみえぬ　このくれに　すかるほたるの　さをに見えけり
同

旬

さなへとる　なつはしつめの　まつりこと　けふをときとて　きこしめす
らむ
同

首夏鶯

うくひすの　声おいなから　夏きても　しつけき庭は　たちもはなれす
同

幽栖夏来

あさ風に　わか葉そよきて　わかこゝろ　夏にうつろふ　にはそしつけき
同

わかやとの　うゑ木のミつえ　つゆちりて　こけの花さく　夏ハきにけり
同

海部

うかひいつる　おきつしほ合　かひなくハ　からき世をしも　いかてわた
らん
同

51オ」

むかしあへる女に

おなしよに　ありとハかりの　なくさめも　はかなやひとは　よそにきく
らむ
同

対樹恋春花

春花を　いまもしたひて　わか葉かけ　とひかふてふそ　吾こゝろなる
同

おひしける　梢動かし　夕かせハ　ふけともちらぬ　はなのおもかけ
同

水鶏驚夢

うきひとの　そもなになれや　おもひねの　ゆめさまたける　たゝくくひ
なハ
同

ことならハ　うきよのゆめも　さまさなむ　たゝきもやまぬ　よはのくひ
なハ
同

まくら

ミつのとも　いまはものうく　老ぬれハ　枕ハかりそ　うれしかりける
同

待郭公

ほとゝきす　こよひかならす　ふりいてゝ　なきとなかなむ　あめもよふ也
同

市

よのちりの　たちさわくなる　いちなかも　心からこそ　やすくすみけれ
同

52オ」

稀逢恋

からいとの　つまはほと〳〵　たゆへしと　みえてあふよも　あれハあり
けり
同

野川に舟ハありなから棹なかりけれハ

わたりもり　いかなるゆめか　むすふらむ　つなきすてたる　のちの川船　同

わたせをと　よふにこたへも　なミの上に　わかこゝろさへ　たゝよへり　同

けり

す、めのこのすたちたるを見て

あさるとて　たちゆくおやを　したふなる　こゝろうつくしき　ひなす、　同

めかな

す、めこの　またかたよわき　は風にも　なひくわか葉の　かけそす、しき　同

新竹

わかたけの　もとつ葉すゑ葉　しけりけり　あさゆふ風の　ふくとせしまに　同

おひそめて　いくかならぬに　夏かけの　うれしきいろを　みするたけかな　同

石堪か前栽のとこ夏に　ちりもはらハぬといふことを

さしておくりけれハ

うるハしき　きみかめつなる　床夏に　ちりてふことは　いかてかくへき　同

52ウ」

船中見花

さしてゆく　かたハたかへと　吾ふねの　さをとりなほし　花をしそミる　同

かけてほす　岸こきはなれ　ゆく船の　あとなき花の　浪のぬれきぬ　同

詞和悲

いつもたゝ　めづらしけなき　ことよさに　たゝよハしくて　よをわたる　同

かな

立よりて　ひかハよりつく　見えなから　岸かけたかき　青柳のいと　同

山残雪

雪なから　かすむたかねの　あけほのハ　心にうかふ　花のいろかな　同

いつしかと　花まちわたる　春の日に　つれなくみゆる　山のしら雪　同

みねの雪　なとゝけさらん　吾やとの　松ハのとけき　春風そふく　同

はるかすミ　すてにあまねき　八重山の　あなたのミねに　のこる白雪　同

分ぬとは　ミえぬものから　春の日の　光にそむく　ミねのしら雪　同

おく山の　真木の下根ハ　いつとけむ　ものともなしニ　のこるしら雪　同

53オ」

いはかねの　なみの音たかく　なりゆくを　雪なほふかし　水上の山　同

かけろふの　もゆる春へを　いつとちる　なほきえさらむ　嶺のしらゆき　同

いまいくか　ありなハつきむ　けふ〳〵と　ミとりそひゆく　みねのしら　同

雪

山さくら　はやも咲めと　かりかねも　あやしむハかり　のこるしら雪　同

野春草

おもかけに　あきのにしきも　春霞　あさミとりなる　のへのはきハら　同

青柳の　えたもしつけき　はる風の　ゆくへしらる、　のへの若草

かすミたつ　のもりかいほを　春草の　花つミかてら　けふやとハまし　同
つみて皆　かへるを見れハ　春の丶に　すミれてふ名そ　ことにし有ける　同
かすみたつ　のへゆきかへり　若くさの　あをきをふミて　あそふのとけさ　同
はつわかな　つミしやいつら　春ふかく　いく田のをの丶　をくさおひけり　同
春の丶に　さくやあさミの　あさましく　あさみはつへき　くさのはもなし　同
たてよこに　春の大野を　とひかひて　わかくさむしろ　てふやおるらむ　同
うつくしく　春の小草の　うちなひき　霜のなこりも　見えぬのへかな　同

53ウ」

あさミとり　かすむおほのに　うちなひく　くさの色こそ　春のものなれ　同

望遠帆

松かけハ　や丶くれ行て　沖わたる　ほのかにのこる　夕ひかけかな　同
つくしふね　いまやはるかに　よせつらん　ほかけつらねて　みえわたり　同
けり
あさあらし　ほとよくおちて　も丶ふねの　ほかけつらなる　青海の原　同
むらさきの　わたると見しも　ときのまに　おきつほたかく　あらハれに　同
けり
いり日さす　とよはたくもと　見えつるハ　なにはによする　真帆にそ有　同
ける
なみ風の　おともしつかに　おほふねの　ほの見えそめて　あくる海ハら　同
夕日さす　しまねハはやく　くれはてて　おきつほかけそ　雲にまきる丶　同
つくしかた　西やふくらん　朝ふねの　ほのかに見えて　あくるうら波　同
うちわたす　あかしのとなみ　たか丶らし　まほにかたほに　ふねのゆく　同
見ゆ
まほたかく　吹上のはまの　このまより　見えてなにはに　はつる百船　同
おきつ風　おひて吹らむ　ありそ波　ほのかにみゆる　なたのうら風　同

54オ」

あれぬれと　軒場の花は　つはくらめ　いくはるかよふ　栞なるらん　同
牛はなつ　野となりゆかハ　此はなや　おのか丶きつの　名をのこすらん
以下同
いるひとも　なくてのとけく　花見るそ　よもきかそまの　かひにハあり
ける
ふるさとに　かくてわかよハ　つくさなん　のきはのはなの　かれぬかき
りハ
ふりぬとて　このさとをしも　いて丶いなハ　心かろしと　はなやおもはむ
そのかミの　さかえしられて　風かをる　たきのミやこの　山さくらはな
さく花の　いろそふりせぬ　かすみたつ　おほミやところ　さたかならねと
みやひとの　かさしのさくら　はなさきぬ　しかの山もり　いまはおかねと
いたづらに　花なちらしそ　あすか風　おほミやひとハ　よしめてすとも
あふミのや　ミやきハふりて　咲にけり　いまもそのよの　はなのさ丶なみ

暮春雨

つゆおもく　こすゑしけりて　はなのくも　いまハあとなき　にはのはる雨
うちしめり　さめ〳〵とのミ　さほひめや　春のわかれの　そてしほるらん
降雨に　ミかさまされと　はるハ今　いつちいくたの　川のしらなミ
54ウ」

さのミなと　あめハふるらん　ちりのこる　はなを丶しめる　ひとにそむ
きて
ふりそ丶く　雨のまかひに　ゆく春ハ　うめのミのをや　とりてきつらむ
春雨の　けふさへふりて　うのはなの　かきねの雪と　日かすつみけり
ゆく春に　はひまつハれる　ふちなみの　いろさへ夏に　うつるあめかな
けふもまた　あめのふるえの　もろ蛙　なきてをしめと　春そくれゆく
かきくらし　あめハなふりそ　と丶まらぬ　よのことわりの　はるのわか
れを
あめそ丶く　わか葉のつゆに　ぬれなから　老ハかくれぬ　うくひすの声

惜別恋

むつましく　つはさならふる　ねくらとり　なかてわかる丶　あかつきや
ある
おほかたハ　ゆふへをうしと　いふめれと　あひてわかる丶　あかつきの
そら
をしみつる　その暁の　おもかけハ　まきのはしらを　たちもはなれす
ふしのまに　あけんとそする　なにはえや　みしかきあしの　よをハたの
めハ
わか丶けを　ひとに見えむハ　うきもの丶　さらにわかれん　こ丶ち社(こそ)せね
玉ならハ　涙をぬきて　きぬ〳〵の　そてのかたみに　とりかへてまし
55オ」

あひ見つ丶　はるるこ丶ろハ　しはしにて　またたちかはる　むねの朝霧
かりそめの　わかれもうしや　しのふくさ　われにのきはの　つ
ゆならねとも

よこくもの　わかる丶ときは　ふたなミの　つくハの山の　名さへうらめし
ゆくすゑを　おもへハこそハ　下のおひの　けさハかた〳〵　たちもわか
るれ

晴後青山

ぬれいろの　ミとりうつくし　しらくもの　はる丶きのふの　あめのかく山

五日節会

ためしとて　あやめのつゆの　たまかきに　うかふちとせを　きこしめす
らむ
ゆくミつの　よとの丶あやめ　ひかれてハ　くものうへにそ　けふハかを
れる
おほ庭に　たちつらなりて　たちはなを　ちかきまもりの　そてにかくらむ

葵

あふひくさ　かさ丶ぬそても　なかりけり　かものミやちに　つとふもろ人
なにそとハ　おもひやりなき　さとのこも　かさすこと丶て　あふひひく
らむ

遅桜

春はよの　はな〳〵しとて　山かけに　ひとりおくれて　けふやさくらむ
55ウ」

詞和恋

たちよりて　ひかハよるへく　見えなから　きしかけたかき　あをやきの
いと

百合

おくつゆの　いろうつくしき　さゆり葉の　ミつはよつはに　花も咲けり

夏月涼

いかてかく　す丶しかるらん　てる月ハ　なつのほかなる　そらハゆかしを

聞声恋

ひさの上に　ならすもはかな　からねこの　声きくのミを　なくさめにして
ものこしに　そならぬ声を　きくにたに　まつうちさわく　むねそくるしき

乍臥無実恋

なよゝかに　そのくろかミハ　うちなひき　ふすとハかりに　明はてにけり
よりそひし　なかの衣の　いかなれハ　こよひたに猶　へたてはつらむ
56オ」

渡五月雨

おほかたの　わたりもいまや　絶ぬらん　はれぬさつきの　天の河ふね

窓前蛍

かひなしと　まとのほたるハ　よるひかる　たま〳〵きても　とまらさるらむ

空帰恋

うちとけぬ　ひとをハさのミ　こりすまに　またよるなミの　たちかへる也

菖蒲

たちならふ　小屋のゝきハも　あやめくさ　ふきのこさしと　けふやひくらむ
つきぬよの　ためしもしるく　あやめくさ　ひきのこされて　なほしけりけり

大淀浦夏

あまをふね　ちれるこのハと　うきみるの　うきてもゝしき　おほよとのうら

玉江夏

かりのこす　つゆのたまえの　あやめくさ　すゑはミたるゝ　さミたれのころ

瓢

としことに　ちなりいほなり　なりひさこ　なりさかゆへき　みにもあるかな
56ウ」

山家五月雨

さみたれに　つねハミつなき　いはまより　たきなミこゆる　山かけのさと
てつくりの　山すかみのも　さみたれの　くもゐへたつる　さとのなかかき
あひそめたる女に行末のこと何やかやとちきりて
いたふらむ　心もしらす　はつくさの　ことの葉しけく　ちきりつるかな

山里にほとゝきすきゝにゆきたるにうの花のさかり也けれハ

ほとゝきす　わかたつねこし　山口に　うらまさしくも　さけるうの花

夏のはしめつかた大ゐ川に船うけて嵐山のわか葉を見る

さ月ニハ　またもきて見む　おほゐ河　うかひかてらに　ミねのわか葉を

幽栖首夏

たれをかも　たえすよふらむ　よふことり　なつのはしめの　いほのしけみに

早苗

さくら人　さなへとるらし　千町田の　たづらにたつの　声さわく也
57オ」

遊女

うかれめの　みハうかひ火の　かけなれや　しつミもはてす　よをわたりつゝ

月前郭公

声のミハ　あかすおもふを　ほとゝきす　月にもかけの　見えすなるらん

閑中蝉

なつのひは　おきてもねても　をりハへて　せみの声のミ　われをかたらふ

樹陰納涼

井のへなる　桐のひとはの　下すゝミ　あかすもけふは　むすひつるかな

瓜

あちきなく　いろにいてたる　山畑の　くろのほそちハ　たれかとるらむ

夏故郷

春きてハ　ゆきま見えたる　ふるさとの　ミちもあとなき　庭の夏くさ
57ウ」

絶後恋人

ひとたひハ　をたえのはしの　うきなから　つきてわたらむ　よしもあらなむ

嫉妬恋

いせの海に　おりたつたこの　とはかりは　うらみとおもへと　さわくあた波

隠恋

いるかたハ　さすかにみせて　かくれたる　月のおもわそ　みにそはりける

山居雨

山さとの　にはのしゝかき　つまこめに　くもたちのほる　あめそさひしき

窟

こけむしろ　しけるいはやハ　山ふしの　あとをとゝめぬ　ふしとなるらむ

本居大刀自の八十賀寄鏡祝

すゝかかは　ちよへん松の　かけ見えて　きよきやそせの　水かゝみかな

祇園臨時祭

あやにしき　とりよろひたる　山ほこの　車おほちを　ひきわたしけり

58オ」

いさむとて　神のそのふに　馬長か　ひきつらねたる　そてそにきはふ

榊葉ニ　ゆふとりして、　みな月の　てる日すゝしき　神まつりかな

蝉

ミな月の　なかはもすきの　こすゑより　秋をちかミか　ひくらしの声

梢たに　ゆるくともなく　あつきひに　きつゝなくなり　せみのはころも

をりはへて　せみのなくねも　わきかへり　しみなかるゝ　松のした蔭

田家夏興

おくつゆも　こゝろよけ也　うゑはてて　風しりそむる　かとのわかなへ

あらかしめ　あきのたのミを　うちむれて　かたるさとわの　夕すゝみかな

をちこちに　水せきワくる　かふちたの　たづらのさとの　夏そすゝしき

野草先秋

ゆふつゆの　にほひそめけり　むしは猶　おのかあきまつ　のへのはきはら

そてにちる　つゆをすゝしみ　花やとき　あきやおそきと　たとるのへくさ

色にて、　なひきそめても　なつの野の　しかハつれなき　萩の花つま

58ウ」

水無月十日ハかり切川のさとにてしきりに時鳥の

なくを聞て

わかなへの　ミつもほとよく　うちなひく　してのたをさは　いまもよふ也

夕立

耳もとに　いまやおちくと　なるかみは　かしこきもの、　あめそすゝしき

なるかミの　光りなからに　ミねこして　いつちゆくらむ　夕たちのくも

祇園臨時祭

みをさきに　ほこうちふりて　みなつきの　かミのみゆきの　つらねてそ

ゆく

照射

ゆふつゝの　光りきえゆく　くもまより　ミねのほくしの　かけそハりけり

寄獣恋

ひとこゝろ　あらのゝとらの　くちのハに　かゝるうきなそ　くるしかり

ける

神祇

ゆふたすき　かけてつかふる　みやひとの　おきなさひても　ミゆるそて

かな

59オ」

夏月

なつ衣　かけうすれけり　かたしきの　ゆめはかりなる　みしかよの月

夏夜易明

すゝしみと　めつるまもなく　おくつゆの　月も光も　かけそ明行

かねのおとハ　うつゝなりけり　枕たに　とりもなほさぬ　ミしかよの月

夕立

降ほとハ　うちミたれたる　すかのはの　つゆすゝしくも　はるゝ夕立

谷風如秋

あきありと　ひとしるらめや　家しまの　たきのうへふく　なつのゆふかせ

草花先秋

おりそむる　くさのにしきの　はしみえて　なつくれかゝる　のへの夕つゆ

みそき川　岸にいろめく　あき萩を　おもへハはなの　ときにそありける
筆
ひとなみに　ふてハとれとも　くちをしく　あとハこゝろに　まかせさり
けり　59ウ」

晩夏風

秋穂たる　ほとをちかみか　かとたもる　いほりすゝしき　夕風そふく
ゆふかけて　すゝしくなりぬ　ミな月の　なこしの山の　ミねの松風
つゆむすふ　まかきにとなる　秋つはの　うすきたもとに　夕かせそふく

岩崎の網のうけを蓋置にして名をこハれけれハ
なたのしほちとつけてよめるうた

はる〳〵と　なたのしほちを　こきくれハ　ミるめになるゝ　あまのつり
ふね

岩本周道か加賀国なる山中のいてゆあみに行けるうまの
はなむけに

つゝみなく　こしにありてふ　しらやまの　ゆきてかへらむ　ほとをしそ
まつ
やまなかに　きみかゆあみの　かひありと　ミねたちならし　しかも鳴らむ

連日夕立

このころハ　いこまかつらき　かたワきて　かゝらぬ日なく　夕たちそふる
夕立の　ふるひさまねミ　つゆしけき　蓮のうき葉ハ　たかくなりけり
60オ」

水無月ハ　ふることわりの　夕立も　日をかさねてハ　いふせかりけり
さりけなく　そらハはれたる　山のはに　かゝるやあすの　夕たちのくも

里蚊遣火

山かけや　うちわたさるゝ　さとなミに　きそふかやりの　夕けふりかな
ゆふかほの　花の下ひも　うちとけて　かたるにあかぬ　さとのかやり火

寄帯恋

こひすてふ　人のこゝろハ　おひなれや　とくれハやかて　むすひそめけり
なかちはの　かみもいさめぬ　みちなれハ　ゆきめくりても　あハんとそ
おもふ

里蚊遣火

風見えて　けふりの末の　一かたに　なひきてくる、　さとのかやりひ

漁家夏月

月なから
つゆうちはふく　鳴つとり　うのゐかいその　さとそすゝしき

背面美人

さしかさす　あふきのつまの　はつ〳〵に　まみのにほひそ　こほれかゝ
れる　60ウ」

世治文事興

とものおとハ　よもに絶つゝ　ひとことに　ことゝふみゝる　ちよのふる
みち
しはしくハ　なみのさわきの　浜ちとり　たえにしあとも　おこるみよかな
左手の　ゆみとるかたハ　おたしくて　ことはのはやし　しけるみよかな

蜘のいとにつゆのかゝりたるをみて

おなしくハ　ゆふかたまけて　月かけも　ぬきてとゝめよ　くものゐのつゆ
しらつゆの　たまぬきかけつ　むら雨の　よそにくれゆく　くものいとすち
さゝかにの　くものぬきたる　たまのをの　ほと〳〵しくも　ゆふかせそ吹

みのいやしきをいとひて人のつれなかりけれハ

いたつらに　ぬれぬよそなき　いとはるゝ　わかみしつえの　松の下つゆ
いやしとて　さのみないひそ　瓜つくり　みのなることも　なとかなからむ

七月四日の夜船にせうようしけるに

こゝにしも　かよひきぬらん　七夕の　ひれふきかへす　あまの川風
なかつせに　ふねさしとめて　風まてハ　水のうへにそ　あきハうかめる
61オ」

初秋風

せみの鳴　梢うこかし　このゆふへ　そてにしたしき　あき風そふく

たなハたの　おるいほはたの　からにしき　またきに秋の　風そたミける

初秋露

うす衣　そてにおほゆる　すゝしさも　またはつあきの　のへのしらつゆ
きのふより　けにそすゝしき　秋といへハ　つゆのこゝろも　おきかはる
なり

新秋月

つはくらめ　また軒場もる　ゆふ月に　かりのたよりや　まちいそくらむ
きりの葉の　一は二はと　ちるまゝに　さやけくなりぬ　のきの月かけ

秋田露

うちなひく　かとたのいなハ　あさゆふの　つゆをふゝみて　やつかたり
けん
うゑしより　こゝろおきたる　さとわたの　いなはのつゆの　あきとなり
けり

秋夕

まはき咲　秋のゆふへハ　おくつゆの　玉しくにはも　さひしかるらむ
61ウ」
あまつかり　いまたなかねと　ゆふつゆの　もるやかとたの　いほそわひ
しき

栽萩

さをしたに　まかせはてんか　くやしさに　ねこし来にけり　のへの秋はき
ねこしきて　うつさぬつゆも　おのつから　ゆふへハふかき　はきのうへ
かな

閑庭萩

わかやとの　かせのやとりの　萩ならハ　あきをあきとも　しらすやあら
まし
さひしとて　さのみいとはし　風のおとも　きゝなしからの　庭の萩原

七夕船

あまの川　まかちしゝぬき　おしわたる　ふねよりさきに　ゆくこゝろか
な
わかこゝろ　ひとひもおちす　のりなから　けふのみわたる　あまのかは
ふね

草花映月

つゆ見えて　なひきあひたる　花ゝに　ひかりをくはる　のへの月かな
わかやとの　庭のつゆくさ　よるみれハ　月こそはなの　にほひなりけれ
62オ」

庭虫

にはくさの　下葉にむすふ　つゆのまも　なとまとろみて　むしの鳴らむ
あきをへて　つゆにたへにし　わかやとの　うきをさのミハ　むしのなく
らむ

七夕霧

ひこほしの　なけきのさきり　なひけとも　天の川ちハ　明わたりけり

七夕山

はかなくて　わかれもゆくか　たなはたの　たむけのやまの　みねのよこ
くも

寄床恋

ものおもふ　わか身をつくし　つく〳〵と　なミたにくる、　とこの海かな
床のちり　いたつらなから　はらふまに　なけきハいと、　たかくなりけり

山中間貫かよませたる今宮の里の八景のうた

荒陵晩鐘

なにハてら　いりあひのかねの　声くれて　あハれさひしき　をかの松風

三津夜雨

ぬるまたに　あまのたもとや　しほるらん　ミつのとまやの　よはのむら
さめ

広田秋月

はふりこか　かへすたもとに　花とちる　ひろたのもりの　あきのよの月
62ウ」

紀路暮雪

かせさえて　ほのかにくれぬ　七越の　みねのあなたの　きちのしらゆき

湊江帰帆

みなと江や　かせもしつけき　しほふねの　ほかけならへて　くれかゝりけり

木津落雁

いくつらか　ともよひつれて　天つかり　きつのさとわた　あきふけにけり

淡路夕照

よるなミの　おともさやかに　夕くれの　ひかりたゝさす　あハちしまやま

清江晴嵐

すみのえの　おきへはるかに　くも晴て　松のあらしの　おとそしつけき

釈奠

海山の　ものをつらねて　おほ前に　おきてまつれる　けふにもあるかな

63オ」

おほくに、　みちをつたへて　まつらるゝ　けふをうれしと　たまやうくらん

秋風に　そてふきかへし　うるハしく　ならふふみやの　つかさひとかな

からくにの　をしへのみちの　大人たちの　ミかたつらねて　けふそまつれる

いく秋か　かけつたへけん　もろこしの　くに、かしこき　ひとのミかたは

おきならへ　まつるきのふの　大御食を　すめらみことの　きこしめすらん

ふみつくり　御饌たてまつる　あきのひの　とくくれをしき　まつりなりけり

山田春思か子うませたるをいはひて

松かえに　はく、ミひたす　ひなつるの　いくちよ〳〵と　なきはしむらん

古寺松

いろのミハ　そのよのま、に　つゆしもを　いくよかふりし　てらの松かえ

御佛ハ　ひさもくつさぬ　寺なから　いらかふりたる　松のしたかけ

新秋月

天の川　くるれハやかて　さしいつる　月のみふねを　ほしにかさなむ

ひとはちる　きりのこすゑの　夕つくよ　ち、にものおもふ　あきハきにけり

いつしかと　つゆもあふきも　おきそめて　あハれみにしむ　そての月かけ

63ウ」

みそきして　なかすきのふの　ゆふつくよ　川せにうかふ　あきそす、しき

夕月の　かつらのつゆを　ふく風や　あきのひかりを　まつちらすらん

あきのたつ　こすゑのせみの　から衣　たもとす、しき　夕月よかな

夕月夜　ほのめくみねの　くもはれて　松にこゑする　あきの初風

きく子か夫のおもひにこもりたりけるころよみてかたへのひとのかりおくる

よのことハ　つはさならふる　ちきりさへ　むなしきとこの　あきのゆふ風

さもこそハ　うきよのなかの　さかならめ　きえけんくさの　つゆのゆくへハ

あめとのミ　さそしほるらん　我たにも　つゆけさまさる　そてのあきかせ

葉月のはしめつかた法流寺にて人、と、もに　うたよみける時

みのむしの　よふち、のきの　こすゑより　あきのいろこそ　みえそめにけれ

川鰕

うちひとハ　さてさしわたし　川ゑひの　手長のみけに　たてまつるらむ

64オ」

山霧

なら山や　いまハみやこも　かみさひて　あききりふかく　かをりみちけり

さしつぎて　しのひたく也　やなかまて　きりたちまよふ　おくのやまさと

萩の屋の萩のさかりに

つゆなから　垣の小柴に　ゆひそへて　あきもさかりに　にほふはきはら

つまこふと　なくなるしかに　おなしくハ　しらせまほしき　萩の花その

しめのうちを　またゆるされて　あきはきの　花のにしきに　たちましりけり

こハはやくみたりしもミとせへにけれハかくよめるになん

又あるし　みすてゝハ　たれかゝへらんさくはきの　つゆもえな
らぬ　夕月のかけ　とよめるかへし
あきはきの　花すり衣　たちわかれ　わかゆくかたを　いかてみるらむ
初秋待雁
かりハまた　かけてもなかぬ　ふみ月の　そらなつかしき　声そまたるゝ
月前虫
馬草かる　のかミのさとの　くつわ虫　月におハれて　こゝらなくらむ
艶女遇他人
我こそと　おもひかけしを　女郎花　あこのおほのに　なひくつゆかな
64ウ」
鹿
ひとよかる　松かねまくら　そはたてゝ　きくともしらす　しかや鳴らむ
おほえやま　きりたちいてゝ　さをしかの　なきていくのに　つまやこも
れる
南郷宗準　加藤照満　服部挙直　村田義堅
このひと〳〵のなをかくして　収といふ字を句の末におきて
よめる月のうた
てりみちて　みなミのさとハ　くれはとり　むらたつくもそ　月におさまる
月照草花
あかなくて　くれにしのちハ　つゆや花　はなやいろなる　のへのはきはら
日ころへたてたる
たのめつる　朔日ころの　夕月よ　いまハつれなき　ありあけのそら
あハすして　いまハ日ころを　ふる衣　うきあかつきを　かさねきにけり
風前鹿
しかのねを　我につてけり　を花ちる　さとわの、への　あきのゆふかせ
65オ」
八月十五夜こよひしもいたつらにねんハくちをしくて川つら
ゆくほとくもたちおほひて月いてぬとハかりほのかなりけれハ

けにくもハ　こゝろもなしや　くにこそり　月まちいそく　夕くれのそら
又大城の御門の外なる原にいて、ミワたすに人けいとまれにて
月ハやう〳〵くもはなれてさしいてたり
た、ひとり　月にうかる、　わかゝけを　心あるさまに　人や見るらむ
釈典
あきのひの　とくくれをしも　からにしき　あやにかしこき　けふのみま
つり
水中月
さてもちて　すくひもあけよ　山川の　やなせにかゝる　月のしらたま
ふたつなき　月のひかりを　ちよろつに　くはりてみかく　たきのしらたま
荒屋月
やへむくら　軒とひとしく　しけりてハ　つひに月たに　すますなりけり
人のあしのはにさして　しるやいかに　なにはの秋の　よはの月
このあかつきの　つゆのあハれを　といひこしけれハかへし
ありあけの　月をあハれと　かそへきて　いまハおいぬる　われをしらすや
65ウ」
あしか花　なひくなにはの　川尻ハ　ところからにや　月もすむらむ
都擣衣
風さむき　月のミやこの　からにしき　うつやくもゐに　声ひゝくらむ
ころもうつ　みやこおほちの　たてよこに　声もみたれて　あきそふけゆく
あハれたる　すさひなるらん　とのへもり　身もはたさむく　ころもうつ声
うつおとも　秋ふけにけり　かも河や　きよきなかれの　ときあらひきぬ
あきさむき　おほうちやまの　山ひこハ　そらに声して　うつころもかな
山家秋雨
山さとハ　つゆよりさきに　にはさくら　うつろひそむる　あきのあめかな
さらぬたに　あきなるものを　やまさとの　あめしめやかに　けふもふり
けり
薄の風になひきたる

あき風の　吹にしたかふ　花すゝき　いまいくかあらハ　雪とちらまし

仙家

ときのまと　おもふにくちし　をの丶えに　うちおとろきて　家をしそおもふ　66オ」

寄秋恋

はしめより　あきてふもしハ　いみつるを　あやしやそてに　かゝるしらつゆ

遠村秋夕

あきふかき　きりのまかきの　ひまもれて　かねの音とほく　くるゝやまさと

をちかたや　あきふけわたる　夕くれの　あハれくらへて　たつけふりかな

萩のうつろひかたなるを

つゆさむき　庭のはきハら　うつろひて　下葉のいろそ　ふかくなりける

秋雲

あきふかミ　しくるゝまてハ　あらねとも　かゝりかゝらぬ　ミねのうきくも

野女郎花

おひらかに　のへのをはなに　たちそひて　そむくいろなき　をみなへしかな

深山鹿

みにしめて　ふけゆく月を　なかむれハ　くもよりをちに　しかそなくなる

よそに見て人をこふる　66ウ」

よそなから　見しとハかりを　おもかけハ　わかみにそへて　たちわかれけり

おにふれて催恋

おほかたの　ふるものかたり　きくにたに　わりなくひとの　しのはるゝかな

菊叢芳

たちならふ　あたしくさはの　つゆさへも　あらそひかほに　かをるむらきく

撰虫

はきにそひ　すゝきによりて　なくむしの　なかきみしかき　声をわくらむ

むしたにも　みことかしこみ　声のあやを　心のかきり　けふやつくせる

すゝきにみかつきかけるかた

さつひとの　ゆみなりつきの　かけ見えて　をしかふすのに　秋風そ吹

菊のえに

なゝかへり　もゝよへつるも　山かけの　このしたつゆに　よりてなりけり

月前竹

からひとの　むかしのふての　あと見えて　たけの葉うつる　月の下まと

67オ」

ある女のこのよにてハあひかたしのちのよをたのめといひけれハ

まことあらは　しにもせましを　のちのよの　あひなたのみハ　せんかたもなし

田家冬興

もみちゝる　さとの翁か　にひしほり　にほひてあそふ　ふゆそゆたけき

冬山にしかのなきけれハ

ゆくあきハ　おくりはてたる　声のうちに　しくれもよほす　ミねのさをしか

遠炭竈

すみかまや　ミねのけふりの　なか絶て　よこくもかゝる　あかつきのやま

霜月朔日のひ

としありと　かみにゝえする　月たえて　しものあさけそ　のとけかりける

冬朝

下さやく　あさてをふすま　ひきすてゝ　まとのとてらす　朝日をそまつ

大公望

いとすちの　なほきハりもて　あめのした　しらさんきみか

こゝろつるらむ　　いと

野鷹狩

ミかりのハ　そらゆくくもゝ　はやふさの　いちはやくのミ　山かせそふく　67ウ」

残紅葉

たゝひとひ　ひとゝきたにも　あるものを　けふもうれしく　のこる紅葉

はしめてふみを見る

ことの葉の　すゑハほのかに　かきなして　おほつかなさを　そふるきみかな

埋火

うつみひの　うもれてのミハ　よをへしと　しものふるふミ　くりかへしつゝ

寒月

くぬきハら　よはのあらしの　おとさえて　こすゑにこほる　ふゆのよの月

こほりにハ　月やさわらぬ　あまの川　かせさゆるよも　かけそなかるゝ

冬の林に小鳥むれゐるところ

小林の　もみちあらはに　ちりすきて　いろとりのみそ　たちさわきける

おひうてと　のこるこのミを　もりはむと　うたてことりの　むれつゝそくる

のこりたる　あきのこのみを　むれはみて　まめうましとや　とりのなくらむ　68オ」

五節

くものうへに　かよるをとめか　からころも　雪の花をも　ちらしつるかな

うるはしき　あまつをとめの　たまかづら　くものうへにや　かけとゝむらむ

荒屋落葉

いまはたゝ　のきも垣根も　くち葉のミ　かさなるふゆの　日かすをそしる

再絶恋

たちかへり　むすふ野中の　わすれ水　いまはたいかて　みちハたゆらむ

時雨のふるよかさかりにたちよりし人に

しくれ降　かさのかりての　わすられし　ひとさへこよひ　おとろかしけり

又うちかへし〳〵といふことをよみておくりたるかへし

むすほるゝ　をけのうみをの　くりことを　いひとくよしも　なミたなりけり

深夜霰

ひさかたの　月もやみかく　たまあられ　ふけゆくまゝに　ちりみたれけり　68ウ」

閑居初冬

かみな月　いつしかくれて　すくるまに　ちかきいほりそ　しくれかちなる

浦千鳥

をちかへり　夕浪ちとり　すみよしの　松のあらしに　たちさわくらむ

垣根寒草

かつ〳〵に　のこるもさひし　あさゆふの　しもふきむすふ　かきのかけくさ

冬松

夕こりの　くもハあらしの　吹ときて　ゆき松かえそ　みねにこたかき

霜

たへのほに　しもさゆるよは　あつふすま　かつきてぬれと　わひしかりけり

あともなく　わたり絶けり　よあらしの　霜吹むすふ　ゆめのうきはし

暁天時雨

あかつきの　けしきをそへて　むらしくれ　くもりもはてぬ　をちの山のは

神無月なかは空いとのとかなりけれハ

かきくらす　しくれのくもゝ　けふのミハ　とほきみやまを　ゆきめくるらむ　69オ」

池水鳥

うつくしき　心も見えて　さゝなミの　ならひてうかふ　いけのをしとり

人の庭に松をうゑてうたこひけれハ
うつしうる　けふよりいろを　あらためて　ちよまつかけの　たのもしき
かな

初雪見参
名のりする　そてのかをりも　たちそひて　けさゝきいつる　雪のはつ花
みかきもり　衛士のたもとの　風さえて　かゝり火しろく　あくる雪かな

船中遊女
かハふねの　ひくてになひく　うかれめの　心よるせハ　あまたならめや

海棠
春風に　ねむりさむらん　たをやめの　はなのくちひる　うこきそめけり

春海
おきつなミ　おとさへたえて　松かせの　吹もやふらぬ　はるかすみかな

夕落□
かはかりハ　さもあらハあれと　おもふまに　ゆるさぬはなを　さそふゆ
ふ風　69ウ」

名所鶴
きみかよハ　すむかひありと　天とふや　鶴の郡に　むれあそふらむ

冬夜難明
しもさゆる　まとのともし火　いくそたひ　かゝけてのちか　ひましらむ
らむ

夕恋
おもふにも　まかせぬひとに　すみそめの　ゆふへハそらに　なるこゝろ
かな

深山幽居
すまハ又　こゝもうきよの　外ならし　わしのかゝなく　おくの山さと

井氷
かとのゐに　むすふこほりハ　よもすから　うつるかつらの　ひかりなる
らん

塩やき衣
うらのあまの　しほやきころも　ぬきかけて　ひとにくからす　みゆる松
かな

□走ハかりものへゆきけるに
ひはりなく　春ちかくこそ　なりにけれ　のへのむきふそ　あさみとりなる
70オ」

遠恋
おきとほミ　ミるめハからす　あひおもふ　こゝろハおなし　うらにまよ
へと

遅
風さゆる　ひむろの上の　さくら花　時におくれし　色としもなし

聞
よをすてゝ　みをおく山の　まつ風も　みゝのそこなる　ちりハはらハし

春色浮水
あさみとり　かすみなかれて　川つらハ　なみのうね〳〵　はるかせそふく

野鶯
うくひすの　声ハさたかに　きゝなから　なほいきたなき　春のあけほの

群仙煉薬図
くすりねる　けふりそかすむ　松のハを　すきてよをふる　山ひとのやと
山人の　くすりはむなる　庭鳥ハ　くものうへにや　声をたつらむ

美人遊春図
あらそへる　はるのこゝろも　にほやかに　ミたれてかさす　はなのいろ
かな　70ウ」
はらへとも　そてのいろかを　したひきて　うたてこてふそ　われにたは
るゝ

春氷
いかてまた　吹むすふらむ　ひもかゝみ　とくをならひの　はるの朝風

若菜知時

雪わけて　ひとにつまるゝ　けふそとハ　わかなもしたに　しりてもゆらむ

庭鶯

こゑわかき　にはのうくひす　こかくれて　うらやさしけに　けさそなくなる

朝柳

さほひめの　ゝとけき春の　朝ねかミ　ミたれてみゆる　柳ハらかな

霞添春光

梅かをり　柳なひきて　しらゆきも　かすめハはるの　ものとなりけり

梅遠薫

松のかを　たけのあらしも　かをりけり　かく山さとの　梅のさかりは

71オ」

早春

さほひめの　かすみのころも　たちしより　ひとのたもとも　春めきにけり

春のはしめのうた

うちわたす　みやこのそらハ　かすむ日も　春とハしらし　雪の山すみ

春旅

わらひをり　柳かさして　はるのひハ　たひをたひとも　おもはさりけり

余寒雪

さえかへり　ミたれて雪ハ　ふりくれと　えたにもためぬ　春風そふく

短

あさゆふに　吾とるふての　つかよりも　みしかきこころ　やるかたそなき

つくし

いさことも　のへのかけろふ　うちみたれ　てことにけふハ　つみつくしてむ

なの花

さとわたの　なのはなさけり　あめちかき　ゆふひのそらも　にほふハかりに

寄海恋

わたつミの　そこつたからの　たま〳〵も　あふことなみに　身をやしつめん

71ウ」

寄貝恋

おきつ風　あらいそなミの　うつせ貝　身のゆくへたに　しらぬわかこひ

こひやす

こひすれハ　ミきりのいけの　水かゝみ　このみは梅の　かけにやせにき

落梅浮水

ミつのうへに　ちりてたゝよふ　梅かゝハ　そらになかるゝ　はるのかはかせ

すミれ

あたなれや　のへのすみれの　こむらさき　にほふをとめか　そての春風

雲雀

わけまよふ　のちのひハりの　つまこもる　床をいくらか　おとろかすらむ

山かすむ　のちのこしかた　ゆくさきに　声するものハ　ひはりなりけり

春水

ゆくミつの　ぬるみそめけり　色みえて　したくさもゆる　さとのなかゝは

せきわけて　わかさとわたを　ゆくミつの　くもてにはるの　いろそなかるゝ

72オ」

紅梅　もの、名

うくひすの　たつねてやゆく　をとめこか　花つみいるゝ　こをハいづくと

水郷春望

あけわたる　いなさほそえの　ミをつくし　はるかに富士の　雪そかすめる

夜かれ

わかやとの　松にきなるゝ　ねくらとり　ひとよもかれぬ　ことそものしき

雨中春艸

てふとりの　つはさしをれて　あめかすむ　春のおほのに　なひくわかくさ

ゆく河ハといふことを三の句におきて

さくらさく　春にわかれて　ゆくかわハ　かへりみをたに　なとせさるらむ

閑居春月

あやもなく　かすみこめてハ　さひしさも　よに、ぬやとの　ありあけの月

鞜青

春の、の　くさのみとりに　たちましり　さもかきりなく　ゆくこころかな

幽栖春月　72ウ」

うちむかふ　こゝろさへにそ　おほろなる　こふかきやとの　はるのよの月

詩

わかしらぬ　からもしとゑの　うたなから　あハれハおなし　こゝろなり

けり

過門恋

せきもりの　うちぬるひまを　もとめても　なく〳〵過る　いもかかとかな

故郷鶯

ふるさとに　なれし春とて　うくひすハ　きくひとなしに　ねをもなくかな

忍経年恋

あさましや　こゝろにこめて　おもふまに　としのかすさへ　みにそはり

けり

霞

海辺春

ゆふ日さす　そらハかすみて　むらさきの　なたかのうらに　春風そふく

春雨夜静

しめやかに　はなのところを　さためけり　はるのあまよの　ものかたり

して

山家流水　73オ」

いくめくり　ゆきめくるらん　山さとの　うしろのみねを　おつるたき河

孤舟

まかひつる　くもハはるかに　あとたえて　おきつほしろく　くれのこり

けり

故人入夢

そのひとハ　ゆめのたゝちに　ありあけの　おもかけきゆる　ミねのうき

くも

戸外春風

百千鳥　さへつりかハす　しハのとに　ひともいさなふ　はるかせそふく

疑恋

たのまんと　おもふこゝろの　つくからに　うたかはしさも　かつまさり

つゝ

ちかくてあハす

あハてたゝ　まよふこゝろハ　くらま山　つゝらをりなる　わかこひちかな

閑中日長

春の日ハ　ことゝふみゝる　しをりさへ　おもひのほかに　ふかくなりけり

すゝな

ふりはへて　とふ人もなし　いたつらに　すゝなはなさく　春のやまさと

梅ちりし　あかたのさとの　かきもとに　すゝなはなさく　春のさひしさ

73ウ」

雨中苗代

なはしろの　けさのミとりを　ふるとのミ　なかめくらせる　ひとにみせ

はや

幽居有余楽

このきミの　かけにかくるゝ　軒ちかく　鶯さへも　きつゝやとれり

正法寺大とこの芋にそへてよをいとふわかみになれし

山てらのいものおやこをいかに見るらんとよみておくりたまふ

よろこひに

うつくしき　いもとしいはゝ　おいなから　なほすきたりと　なにもこそ

たて

白蔵主

はかなくも　おのかこのみを　すてかねて　こゝろのやみに　まよふなる

らむ

鉢たゝき

ひとのよの　むなしきことハ　なりひさこ　うつゝもゆめと　おとろかし

つゝ

寄亀祝

かめのこの　うまこのすゑの　末のこの　末のよはひも　きみそかそへむ

74オ」

富景楼十景之中恩智流蛍

からたまを　みたすほたるか　みなかミハ　やまと川てふ　なかれなからに

さつきやみ　あやなくくるゝ　川見えて　ミなかみしもに　ほたるとふ也

おなし楼にのほりて

めちとほく　よもののそみも　うちはれて　うへ春秋に　とめるやとかな

たかやすの　山もとかけて　はる〳〵と　春のにしきハ　むらこなりけり

吉田主の殿よりたまハせたる硯のふたに蘭をかきたるに

あるひとの□□といふ名をおふせて其心をよみし歌こハれ

けれハよめるそのことのよしハ鶉居の大徳のからさまのふみに

つくされたり

蘭（ふじばかま）かをりあひつゝ　うまひとの　うまきこゝろは　へたてさりけり

蛙

月かすむ　かとたのかはつ　声たてゝ　ねふりもよほす　はるのよはかな

うちむれて　さとのかはつの　うた袋　ひもとくはなの　かけになくらん

あひおもふなかを人にさまたけられて

ゆふきりの　たちまよふなる　このころハ　くもゐのかりの　声もきこえす

74ウ」

春江花月夜

おほゐ川　いり江の花の　しら波に　たゝよふ月の　かけそかすめる

互恨恋

うらむれハ　うらみかへして　こひ衣　かたみにふかき　こゝろをそしる

寄菅恋

すかの葉を　やはりにさきて　はらへとも　うきハみにそふ　こひころ

もかな

桃

くれなゐに　そらも匂ひて　夕つくひ　さすやたかつの　のへのもゝその

海人

かつきする　いせをのあまよ　ことならハ　みてかへらなん　わたつみの

ミや

弥生に山寺に詣て

くもゆきと　めてあらそひて　ひとそくる　つねなきはなの　にしの山てら

夕春雨

山てらハ　かすミてくる、　あめのひも　ちかくきこゆる　いりあひのかね

梅浮水

うめの花　ちりて井手こす　水のうへに　にほひなかる、　春の山河

75オ」

初花

いま〳〵と　ひとにまたれて　庭さくら　うれしきいろを　けさハみせけり

田家春雨　吉田氏会

たつたみの　ミのもしをれて　すきわたす　よしたのさとの　はるさめの

そら

さとひとハ　まかぬたなゐの　みづくさも　ふかきみとりの　はるさめそ

ふる

あめそゝく　田中のさとの　暁に　しつけく晴を　よふことりかな

藤

ふちのはな　咲そめにけり　鶯の　声もおいその　もりのこすゑに

ゆくはるを　まとひもとめす　うちなひき　なつにひかる、　ふちのはな

かな

色

めにみゆる　もの、いろより　よのなかの　ひとの心の　あやもなしけり

題しらす

雪しくれ　山のかすみハ　いまさらに　いかてかふゆに　たちかへるらん

むらしくれ　をりたかへたる　山吹の　みのしろころも　なきそわひしき

山吹

山吹を　なみもやあろふ　しろたへの　うのはなころも　いまたゝんとて　75ウ」

瀧辺落花

はる風に　こすゑはなれて　くさかのや　はなさきかゝる　たきの白浪

みゝあらふ　たきのなかれの　きよき瀬に　うきいろ見せて　花そうかへる

春尽鳥声中

おほそらに　なくやひハりの　声のうちに　くるゝか春の　そこはかとなく

せき山や　すきのこのまの　よふことり　過ゆく春を　よひもとゝめす

水音似雨

たゆミなく　あめのおとして　しめやかに　のきはにちかく　おつる山河

ほし見えて　そらハくもらぬ　山水の　われにきせたる　あめのぬれきぬ

三好之信か父の二月のはしめつかたみまかりけるに

あたものと　なにたつ花に　さきたちて　きえつるえたの　つゆそはかなき

弥生廿日ハかり日下の里に行たるにそらかきくもり

冬のさましてうちしくれたり　その日ちかきぬかたのさとの

みよし某かことをおもひて　76オ」

ぬかた山　ふりにしあとを　たつぬれハ　春もしくれの　かきくらしつゝ

春夜夢

さくら花　ちるハまさしき　はるのよの　ゆめおとろかす　庭のあさかせ

二夜へたてたる

ひるまたに　おほつかなきを　たまくしけ　あくるふたよの　めさましき

かな

苗代

いくしさし　みとまつる也　里ゝに　いまやあきほの　たねおろすらん

暮春霞

かすみさへ　花のいろさへ　山さとハ　春とゝもにそ　うすれ行ける

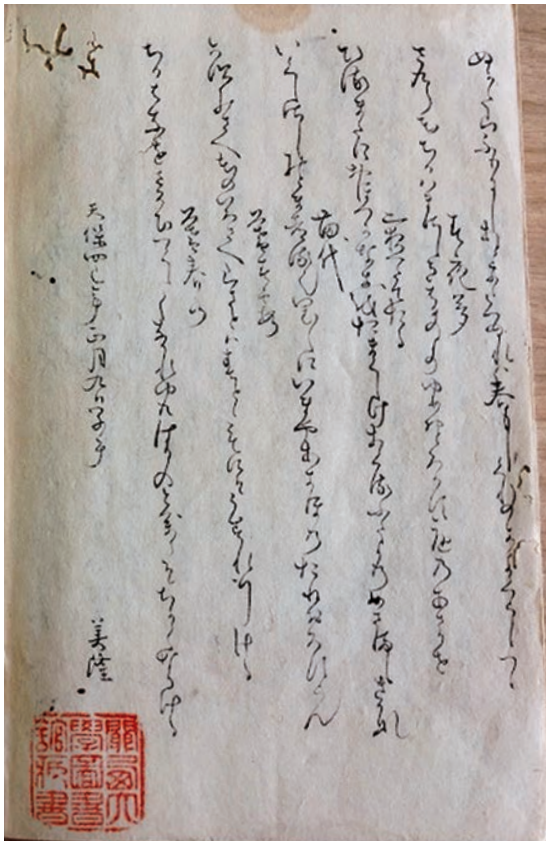
暮春水

ちるはなを　さそひつくして　なかれゆく　はるのとまりそ　ちかくなり

ける

天保四巳年正月九日写乎

美隆　76ウ」



第76丁裏